

令和元年6月9日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02742

研究課題名（和文）述語体系の変化と文法カテゴリーに関する研究 - 古代語を中心に -

研究課題名（英文）A Study on Grammatical Categories and Changes of Predicate Systems -Focusing on Old Japanese-

研究代表者

仁科 明 (Nishina, Akira)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：70326122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：いくつかの文法カテゴリーにまたがる意味・用法を持つ述語形式の意味・用法の観察を行うことで、それらの概念の絡み合いを検討し、また、広義希望表現形式の整理・検討を通して文法形式によってある種の意味（ここでは希望や願望）が表される背景は単純でないことを確認した。また、名詞一語文（特に喚体的な一語文として問題にされてきたもの）の意味・用法への観察と考察を深め、肯定/否定、時間性などの文法的意味の背景を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語文法史の研究（個別共時態の研究も通時的研究もふくむ）でも、近年、言語学的な知見を利用したものが増加している。しかし、それらは対象とする言語や前提する理論的な立場によって微妙に異なっているように見える。また、日本語文法史研究に必要な概念がどのようなものであるのかについては自明のものではない。具体的な事象の検討にもとづいて再考することが必要である。

本研究は具体的な文法形式（「べし」や希望表現形式）や文法現象（名詞一語文）の検討を通して、そのような作業を行ったものであり、また、意味と形式の関係の複雑さを確認し、文法概念の根拠に踏み込んだ点でも文法研究全般への意義が大きいと考えている。

研究成果の概要（英文）：First, I observed the meaning and usage of predicate forms that have meanings and usage concerning some grammatical categories. By this I considered the entanglement of those concepts. Also, I sorted out some forms of grammar forms through the arrangement and examination of desired expression forms. It was confirmed that the background in which the meaning (here, hope and aspiration) is expressed is not simple.

In addition, I deepened the observation and consideration of the meaning and usage of noun single-word sentences, and considered the background of grammatical meanings such as polarity and temporality.

研究分野：日本語学・日本語史（文法論）

キーワード：文法カテゴリー 認識的モダリティ 行為指示的モダリティ 証拠性 希望表現 時間性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

文法研究を進めるうえで、基本概念やカテゴリーが共有されていることは重要であるが、対象とする言語や、研究者の属する研究伝統によって、概念の定義や理解にズレが大きいことも事実である。この点は、周辺の概念はもちろん、主要な概念として研究に広く利用されてきている「テンス」「アスペクト」「ムード(モダリティ)」なども例外ではない。きちんとした整理が必要である。

一方、研究代表者のこれまでの研究は、古代語の述語形式の体系とその変化に関するものである。その中で、「現実/非現実」、「確言的な叙述(確言)/想像的な叙述(臆言)」という区別を軸にして、古代語の述語体系の大まかな見取り図は示してきている(下図)。

古代語(上代語)の述語形式の体系

	現実(過去及び現在)				非現実 (未来・可能性)
	過去		現在		
	已然	未確認	現然	未確認	
確言	a き・(けり)	d けらし	b φ	e らし	h べし
臆言	-	f けむ	-	g らむ	c む・まし

こうした議論の中で、意味記述に問題を残し、細部を詰め残してきた形式がいくつかあった。具体的には、「べし」や、「つ」「ぬ」「けり」などである。これらの形式が問題となったのには、「ムード」や「アスペクト」そして上述の「エヴィデンシャリティ」、「ミラティヴィティ」といったなどの文法概念、そしてそれらの相互関係(相互の用法展開の可能性)に関する検討が不足していることが大きい。これらは、複数の文法カテゴリーにまたがる意味・用法を持ち、また、用法間の位置づけが困難で、いまだ同意を得られていない形式でもあるからである。当然ながら、上述の体系と、一般的な文法カテゴリーを用いた記述との関係を示す必要もあった。

研究代表者は、すでに上記のような問題意識から、近年、それら述語にかかわる文法概念の検討と自らの研究に即したかたちの再定義をこころみ、述語形式の意味記述へとフィードバックしていくことを始めていたが、それを一歩進め、さまざまに提案されてきている文法カテゴリー間の関係がどのようなものなのか、について考察し、古代日本語の記述に必要な文法範疇について、知見を深めることが必要だと考えていた。

2. 研究の目的

文法研究に用いられている概念やカテゴリーは、上(1. 研究開始当初の背景)でも述べたとおり、言語間で同じである保証はなく、また、言語類型論的な研究で提起されてきた概念が、個別言語の記述に本当に適切なものであるのかについても自明ではない。本研究は、古代語の個々の述語形式の分析を通して、古代日本語の共時的体系とその後の変化に関する研究に利用することの可能な概念がいかなるものでありうるのかを明らかにしていくことを目指したものであった。

具体的には、第一に、研究代表者がこれまでに考察してきた「らし」「らむ」「終止なり」「けり」などの意味・用法の広がりを通し(と並行する形で)「エヴィデンシャリティ」を再考することが考えられる。「けり」については、鈴木泰『古代日本語時間表現の形態論的研究』(ひつじ書房 2009)が「テンス」形式ではなく、「エヴィデンシャリティ」に関わるものとする基本理解と連動させて、「気づき」用法を「ミラティヴィティ」と関連付けており、そうした議論の当否もあわせて検討を考えていた。ここでも、「ミラティヴィティ」と関連付けられる「ミラティヴィティ」と、「モダリティ」の領域で問題にされるそれとは、異なるものであるからである。第二に、「べし」や「む」「まし」の意味を考えることを通して「ムード」「モダリティ」やその下位概念としての「エピステミック(認知的)モダリティ」「デオントック(行為指示的)モダリティ」「ダイナミックモダリティ」といった概念を、それぞれ再考したいと考えている。Sweetser『Frometymologytopragmatics』(1990 / CambridgeUniversityPress)などの言語学系の意味変化に関する(今となっては古典的な)研究に沿って、「デオントック」から「エピステミック」への変化としてとらえる議論(「べし」については高山善行氏など)もあるが、「べし」「む」「まし」などについては、異なる把握の可能性も十分に考えられるものであり、これらの形式の意味・用法の広がりについて再考することは、文法概念の再検討のためにも、有益な議論となり得る。また、第三に、「たり(り)」や「つ」「ぬ」の意味の広がりについて考察することを通して「アスペクト」、「パーフェクティブ/インパーフェクティブ(完成/不完

成)」、「パーフェクト」などの概念の再検討を行うこともできるであろう。このような手続きを通して、古代語の述語形式とその体系の理解、そして、体系のその後の変化を考えていくうえで、必要かつ十分な文法概念がどのようなものであるのかという点について、見通しを得られるかと考えている。現代語で、文末述語形式の配列順序が意味カテゴリーと大まかに対応するという知見にもとづき、古代語でも、語順と意味カテゴリーとの関わりをいう議論がある(高山善行『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房/2002など)が、そうした議論が古代語において、どこまで妥当なのかを論ずる手がかりにもできる。

本研究は、古代語の述語体系に関する研究と、文法カテゴリーの再検討という、研究代表者自身の研究の二つの流れ 具体的には2015年度早稲田大学特定課題研究(基礎助成)「古代日本語述語体系の動態的記述 - テンス・アスペクト・ムードと文法変化 - 」および、同特定課題研究B「古代語における述語の文法カテゴリーとその相互交渉に関する研究」を統合するような形で、具体的な現象(述語形式の意味や振る舞い)の分析と並行してすすめる(もちろん、一方で、資料の整備も行っていく)点に特色がある。現在の日本語文法(史)研究は、上滑りした抽象的な概念操作(あるいは、先行研究の議論や概念の現象への単純な当てはめ)と、些末な細部に拘泥した記述とに分裂してしまっているようにも見える。本当に必要なのは両者をつなぐような研究であろう。本研究は、その蝶番となることを企図したものであった。

3. 研究の方法

研究はオーソドックスなものである。本研究が目指すような抽象的な課題(文法カテゴリーの検討)では、議論が抽象化し、上滑りなものになりがちである。それを防止するためにも、具体的な文法形式の意味・用法や文法現象を検討する中からこうした問題に答えていくこととした。

具体的には、各年度ともにイ「各概念の使用実態の調査」、ロ「古代語述語形式の実態に関する調査」、ハ「各形式に関する考察と概念の整理・検討」の作業と、ホ「成果の発信」の合わせて四本を研究の柱とし、次第に後に挙げた項目に重点を移していくこととした。既にいちおうの検討のすんだ事象にもとづく問題から始め、また、いくつかの柱を並行して走らせることで、研究上のトラブルと遅延の発生に対処することを考えた。

4. 研究成果

以下、まず、年度別に成果を整理したうえで、全体の成果についてまとめる。

2016年度

古代語の述語形式は、一つの形式がさまざまな文法カテゴリーにわたる用法を持ち得、一方で、同一の文法カテゴリーに属するものとして扱われる用法が幾つかの論理で表されることもある。文法カテゴリーの再考の上でも重要な事象であると言える。そこで、「べし」と広義の希望表現(意志・希望・願望にかかわるものをこう呼んでおく)に焦点を当てて研究を進めた。

まず、「べし」については、上代の用例を対象とし、用法を再整理した上で、述語体系での位置づけを出発点に、説明を試みた。「べし」は非現実事態に対して積極的に保証を与えつつ述べるような形式(非現実事態-確言)の形式であるにとらえられ、いくつかの意味カテゴリーに渡り、複雑に見える意味の広がり(A種=様相的推定と呼ばれてきた用法、B種=論理的推定と呼ばれてきた用法、C種=当為・意志などと呼ばれてきた用法、X種=可能・危惧/行為不可避の状況とでも呼ぶべき用法)は、保証の背景の様々によるものと考えられるとの理解(下図)に達し、論文にまとめた(5主な発表論文等欄〔雑誌論文〕1))。個々の文法カテゴリーとの関係の理解も深められたと考える。

非現実事態の主張の根拠		
A種	B種	C種
事態の成り行きへの判断根拠		価値次元からの根拠づけ
現実そのこと	現実と別次元から成り行きを規定	

X(非現実事態成立の主張の含意)

一方、広義の希望表現については、事実整理と全体像の把握に努め、基本アイデアについて、

口頭発表も行った。

2017 年度

名詞一語文の意味分化の理解を深化させることを通して、文が表す意味 - 述語文では述語形式がそれを担う - が発生する根拠を考察する作業と、昨年度から引き続き、広義希望表現に関する理解を深める議論を行った。

名詞一語文については、研究代表者はかつて、喚体的名詞一語文の意味(懐旧・感動・希望)が時間性(「過去・現在・未来」)に沿って分化することを述べていたが、今年度の研究では観察と考察を深め、さらに、それらが「在/不在」によって基礎づけられることを確認し、口頭発表を行った(5 主な発表論文等欄〔学会発表〕2))。このことは、時制や肯否、希望といった内容 - 本研究がテーマとする文法カテゴリーとも関連する - が、文を述べることと密接に関わることを示唆するものであり、今後の述語体系に関する研究の基礎となり得るものではないかと考えている。

広義希望表現形式については、前年度に得た全体像に関する基本的アイデアに沿って、調査と考察をすすめて、上代語の諸形式の内、述語について事態の存在や実現の希望を表す「もが(も)」と「てしか(も)」に関する検討を進めて口頭発表を行った(5 主な発表論文等欄〔学会発表〕1))。

2018 年度

昨年度、一昨年度に引き続き、主に上代の広義希望表現形式について考察をすすめた。研究代表者の述語体系理解からは説明しにくいものを中心に検討と考察を行うことで、(広義の)希望表現形式の中にも、形式が希望の意味を表す背景(理由)にはさまざま(少なくとも4種)があり得ること、そのような違いに応じて、上接活用語の活用形とのかかわり方にも複数あり得ることを確認することとなった。このような考察を踏まえて、前年度の口頭発表の内容をブラッシュアップし、「活用語+もが(も)」、「てしか(も)」に関する議論を活字化した(5 主な発表論文等欄〔図書〕1))。全体の展望と、これら以外のいくつかの講義希望表現形式の類型についても見通しをも述べた。

一方、時制形式(と、関連が指摘される「エヴィデンシャルティ」、「ミラティヴィティ」概念)についても調査・検討を続け、また、本研究課題の総括に向けた議論も行った(本課題の直接の成果ではないが、こうした検討の成果は、大木一夫『文論序説』(文の表す意味に関わる重要な著作である)への書評 日本語の研究 14-4, pp.65-72, 2018-12 にも活かされている)。

総括

以上、原理的な考察(文法カテゴリーの根拠に関する研究、文法カテゴリーの再考と規定をめぐる研究)と、古代語の個々の文法形式・文法現象の意味の検討(「べし」、名詞一語文、講義希望表現形式)とを並行的に進めることで、研究課題への理解を深めることができたと考えている(どちらか一方にかたよらないものになったことは、本研究の方法の独自性によるものである)。前者に関しては、口頭発表での公表にとどまり、直接的・具体的な成果を論文のかたちで公表することはできていないが、研究代表者の今後の研究の中に活かしていくことができると考えている。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- 1)仁科 明、状況・論理・価値—上代の「べし」と非現実事態—、国文学研究(早稲田大学国文学会)、179、2016.06

〔学会発表〕(計2件)

- 1) 仁科 明、注意と情動 - 対象への注意に関わる名詞一語文とその周辺 - 、早稲田大学日本語学会 2017 年度後期研究発表会、2017.12.16
- 2) 仁科 明、「もが(も)」とその周辺、早稲田大学日本語学会 2017 年度前期研究発表会、2017.07.08

〔図書〕(計1件)

- 1)仁科明(ほか全36名)、沖森卓也(編)『歴史言語学の射程』、三省堂、全624頁(担当箇所 pp.13-27 横)、2018.11

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。